

主題	より良い生活を目指して
副題	ティッシュや紙や糸切れ等を口に含む、転倒の多い〇様へのアプローチ

アプローチ	生活空間の工夫	研究期間	24ヶ月
-------	---------	------	------

事業所	社会福祉法人浴風会 特別養護老人ホーム第三南陽園		
発表者：橋本 淳（はしもと じゅん）		アドバイザー：牧野 剛史	
共同研究者：宮村七歩 澤崎玲奈 第三南陽園4階職員一同			

電 話	03-3334-2193	E-mail	Info-dai3@yokufuukai.or.jp
FAX	03-3334-2198	URL	http://www.yokufuukai.or.jp

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	社会福祉法人浴風会は、杉並区高井戸に位置し、大正14年に関東大震災の被災老人援護を目的として設立された高齢者の為の保険・医療・福祉の総合施設です。第三南陽園は、浴風会が平成14年に開設した3番目の特別養護老人ホームで、計222名（入所207名、ショートステイ15名）のご利用者が生活をされている施設です。
------------------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

私たちの働いているフロアは介護度の高いご利用者が多いが、〇様はご自分で歩かれる等、比較的自立をされている方でした。

〇様は入所して間もなく、他の居室へ入る、他のご利用者の食事を取って食べるという行動が見られるようになりました。また、ティッシュや紙やタオルの糸切れ等を口に入れる行動も多く見られるようになりました。飲み込んで仕舞う時もありましたが、ほとんどが口の中に含んでいる状態で見つけており、大きな事故には至っていませんでした。

〇様は歩かれる方ですが、足元のふらつきがあり、かつ、トイレに行く事が非常に多い方でした。センサーマットを使用して早期に対応をしましたが、センサーが反応をして訪室した際には間に合わず、転倒している事が多くありました。幸い、骨折等の大きな怪我には至っていませんでした。

普段、介護度の高いご利用者を支援することが多い私たちが、ご自分で動かれる認知症のある〇様にどのように支援をしていけばいいのか、〇様はどのような生活を望んでいるのかを考え、取り組む必要が生じました。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

- 〇様の周囲の環境を整理して、安全安心にご自分で好きなように過ごせる生活空間を確立する。

- 〇様のティッシュや紙や糸切れ等を口に入れる行動の要因を探り、大きな事故に繋がらないように対応し、改善を図る。

- ご利用者の生活をより良くする為にはアプローチを積極的に行う必要があるという事を、職員が再認識する。

《3. 具体的な取り組みの内容》

【対象者】：〇様。男性。91歳。要介護3。

【既往歴】：アルツハイマー認知症。高血圧。腰痛。

【身体状況等】：

【移動】歩行、見守り

【排泄】昼夜トイレ、見守り

【食事】米飯刻み、自立

【その他】性格は穏やか、几帳面。昔の仕事は服屋で裁断をしていた。転倒が多い。色々な物を口に含む。奥様が同じフロアに入所。

はじめに、〇様が望むと思われる生活を考えました。生活歴や日頃の〇様の発する言葉・表情等を観察した結果、『日向ぼっこがしたい』『食べること』『トイレに安心して行く』『仕事が好きだった』『園芸をしたい』『奥様との関わりをとりたい』といったことが、〇様の望んでいるものではないかと思われました。

そのことを中心にアプローチを行い、生活環境を整えました。その上で、色々な物を口に入れる要因を考え、転倒を軽減できるように取り組みました。

《4. 取り組みの結果と考察》

〇様の居室前にくつろぎスペースを設けました。自分の居室を認識され、他の居室へ入ることは無くなりました。居室が近くなった分、心配なくトイレに行けるようにもなりました。くつろぎスペースは日向ぼっこが好きな〇様の為に、陽の当たりが良い場所を選びました。昔の仕事が服屋で裁断をしていたとのことで、大きめのテーブルを用意し、エプロンやタオル等の畳みものをして頂く場所も兼ねました。くつろぎスペースにはソファも配置して、周りを気にせずに奥様と話せる場所としました。職員も一緒に座ってコミュニケーションをとる時間が多くなりました。

転倒を減らし、トイレに安心して行く為に、定期的に職員と散歩をしながら歩く機会を増やし、下肢筋力維持を図りました。居室等には、

重りを付けた椅子を並べて手すり代わりにして頂き、安全な歩行を可能としました。くつろぎスペースとトイレの距離が近くなったこともあり、はじめの頃は転倒を繰り返すことが多かったですが、取組後のここ1年は減少結果が見られました。

食べることや園芸等、好きなことにも定期的にアプローチをしました。園芸では主に水撒きをしました。食べることでは、レストランや外出先で好きな物を食べ、普段から間食も行いました。食に関して物足りなく、口寂しかったのが原因だったのか、はじめの頃に見られた色々な物を口に入れるという行動が、取組後のここ1年はほとんど見らなくなりました。

《5. まとめ、結論》

〇様の生活は以前の状況に比べて改善されたことが多く、安心安全になり潤いを増しました。

ご利用者へ様々なアプローチをすることは、そのご利用者の生活をより良くする為には必要不可欠なことだと再認識しました。そのことをフロア目標にも掲げ、積極的に関わるようになりました。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《8. 提案と助言》

どこの施設でも忙しく、現状維持に留まってしまう現状が少なからずあると思います。ですが、アプローチなくして、ご利用者の生活はより良くなれないということをあらためて意識して頂ければ幸いです。

【メモ欄】